

55プラス

古地図を歩く ①

切絵図で知る江戸の面影



品川神社の石段をのぼる「江戸歴史散歩の会」の一行。先頭が代表の榎本民夫さん＝7月、東京都品川区

江戸時代、旧東海道最初の宿場としてにぎわった東京・品川。京浜急行・北品川駅にほど近い小さな案内板の前で、十数人の男女が目をこらす。「江戸歴史散歩の会」の一行だ。

ここはかつて、「磯の清水」と呼ばれる名水が湧いた場所。宿場町の貴重な水源で、干ばつでもかれなかつたと言われている。

「見てください、切絵図（江戸時代の区分地図）にも、江戸名所図会（挿絵つき名所案内）にも、ここに

井戸が描かれているでしょう。海辺でも真水が湧いたんですね」

案内役は、会代表の榎本民夫さん(53)。当時の様子を伝える切絵図や浮世絵などを切り張りした手作り資料を使い、解説する。

品川沖に迷い込み、江戸中の評判となった巨大クジラの供養碑「鯨塚」、三代將軍家光が沢庵禪師のために建立した東海寺……。一行は寺社や史跡を4時間かけて歩き、江戸の面影に思いをはせた。

古地図散歩の達人として知る人ぞ知る榎本さんは、東京都稲城市で工務店を経

営する。「平たく言えば大工、棟梁です。いまも、かね尺を使い、木造在来工法の家を建ててます。江戸時代のお城や蔵だって修理できますよ」

切絵図を手に歩くと、当時のままの道筋が東京のあちこちに残る。武家地と町人地では、今も雰囲気が違うという。「石垣ひとつ、樹木1本でも痕跡を見つけて、江戸のにおい、暮らしの息づかいを感じるのが好きですね」

会立ち上げは2001年。自分のウェブサイト「江戸歴史散歩」で同好の士を募ったところ14人が集

まった。以来10年、散歩は170回、会員は1千人を突破した。申し込みが多いため、複数の日程、班にわけて実施している。

花や木に詳しい人、お墓めぐりが趣味の人。女性の参加者も増え、すでに4人に1人という。今回の品川宿コースも、女性スタッフが提案したものだ。

「食べ歩きが趣味の会員に教えられ、甘いモノにも詳しくなった。品川には、江戸時代に名産だった品川カブを使った『江戸野菜スイーツ』が食べられる菓子店もあるんですよ」

(清川卓史)

▼あすは「時代小説の舞台を訪ねる」です

◆ご意見・体験はseikatsu@asahi.com

55プラス

古地図を歩く②

時代小説の舞台なぞで

時代小説の舞台訪問に役立つ関連書の例

時代小説の舞台を見に行く
嘉永・慶応 新・江戸切絵図(人文社)
「寺社」「門」「坂・道」「橋」などの
名前から切絵図上の位置がわかる
巻末索引が充実

決定版「鬼平」「剣客」「梅安」
池波正太郎が愛した江戸をゆく
(朝日新聞出版)
「パート1・2」の2冊。池波本人や作品
ゆかりの舞台を訪ね歩く散歩コース
を詳しく紹介

東京時代MAP 大江戸編
(光村推古書院)
紙に印刷された古地図とトレーシングペ
ーパーに印刷された現代図を重ねて見
ることができる



The Asahi Shimbun

古地図が手に時代小説の舞台を歩く。ファンには興味のつきない楽しみだ。そのコツを教えてもらおうため、池波正太郎記念文庫(東京都)を訪れた。「これが池波さんが使っていた本物の切絵図です。きれいでしょ?」切絵図はいわば、江戸時代の区分地図。同文庫指導員で池波正太郎のアシスタントを15年間務めた鶴松房治さんが貴重な資料を見せしてくれた。「池波さんにとって、切絵図は必需品。取

材に持ち歩き、傍らに置いてイメージをふくらませ、小説を書いていました」本人は切絵図の魅力をこう語っている。へいくら見ても見飽きることがない。日本の、江戸の職人の巧妙織細な手指のはたらきが、このように美しい木版刷りの地図を生んだのだ。(池波正太郎「江戸切絵図散歩」新潮文庫)

「鬼平犯科帳」「剣客商売」――。人気シリーズは切絵図から生まれたといっても過言ではない。「池波さんは江戸の町をほぼ正確に描いた。読んだ後に切絵図で確認すると、一層物語

がわかる」と鶴松さん。手ごかりは、場所や名前が変わっていない寺社、それに橋と川だという。例えば――。鬼平こと火付盗賊改方長官・長谷川平藏と密偵たちが度々おちあろ「軍鶏なべ屋・五鉄」は、本所・二ツ目橋にあつた。切絵図と現代図を見比べれば、二ツ目橋は両国駅にほど近い現在の二之橋にあたる。一方、平藏の役宅は清水御門の外、今の千代田区役所付近だ。「ここから両国あたりまで平気で歩いていた。鬼平も密偵も、江戸の人は足が強かったんです」(鶴松さん)

◆ご意見・体験はseikatsu@asahi.com

▼あすは「江戸の必需品」切絵図とは?」です

55プラス

古地図を歩く ③

復刻版なら安く買える

約260年間続いた江戸時代。江戸東京博物館の専門調査員・近松鴻二さんによると、この間に刊行された「江戸図」の数は、ゆうに1千種類を超える（改訂版含む）という。

当時の江戸は世界有数の大都市。全国から多くの武士や町人が集まった。「ところが武家地には住所表示もなく、武家屋敷には表札もなかった。有力者に『つけとどけ』するにも、地図は必需品だったのです」（近松さん）

古地図歩きでよく使う「切絵図」は、いわば携帯版の江戸区分図だ。版元によって4種類ある。屋敷が密集していた「番町」（東京都千代田区）の地図が初めだった。

当時から人気で、現在も数多く復刻されているのが、嘉永2年（1849）から売り出された「尾張屋」版。「東都浅草絵図」「本所深川絵図」など約30枚の区分図で、江戸全域をカバーした。

武家地は白、寺社地は赤、町人地は灰色と、多色刷りの見やすさが売り。江戸みやげとしても重宝され

たと言われている。

実用的な工夫もあった。絵図を見ると、屋敷の主の氏名の向きがふぞろいなことに気づく。その理由を近松さんが教えてくれた。「名前の向きが正門の位置を示しています。何千坪という広いお屋敷もありますから。また家紋が記された屋敷は大名が住む『上屋敷』など、屋敷の種類もわかったのです」

江戸時代の切絵図を古書店などで買い求めようとすると、1枚数万円、セットで数十万から100万円かかってしまう。

文社（東京都）は、尾張屋版の切絵図を復刻し、1枚1050円（税込み）で販売している。渡邊實社長は「江戸時代と同じ大きさで復刻しています」と話す。寸法は地域によって違いますが、折りたたむと同じサイズになる。

切絵図本体に価格表示はないが、「一説には、嘉永の時代で1枚124文だったと言われています」と渡邊社長。貨幣価値は時期によって異なるが、1文25円で計算すると、3100円。30枚セットなら9万3千円。必需品とはいえ、かなりのお値段だった。

◆ご意見・体験はseikatsu@asahi.com

復刻古地図「嘉永三年 外樓田永田町 繪圖」（人文社）の一部。半蔵門周辺

▼あすは「いにしへの京・大阪を再発見」です

古地図を歩く 4

消えた名所に思いをはせる

千年の都・京都。

京都の観光企画を手がける「らくたび」代表取締役で、カルチャーセンターなどで「京都学」講師も務める若村亮さんは、「洛中洛外図」を使った古地図散歩を提案する。

室町後期から江戸時代にかけたの京都の街並みを俯瞰して屏風に描いた洛中洛外図。「寺社の位置や道筋はかなり正確。当時のランドマークがそのまま残って

いるのが京都の面白いところですよ」と若村さん。

魚売りや風呂屋など当時の暮らしぶりもかいま見える。イメージを頭に入れて散策すると、ひと味違った楽しさがあるという。

一方、古都から消えた名所に思いをはせる楽しみもある。「花洛一覽図」という江戸期の鳥瞰図。東海道の三条大橋などとともに、ひととき巨大な建築物が「焼失してしまいました

が、奈良の東大寺に匹敵する大仏殿が、方広寺にあったのです」（若村さん）

天下の台所・大阪。

「大阪古地図むかし案内 読み解き大坂大絵図」（創元社）の著者で、作家の本渡章さんは、古地図の楽しさをこう語る。

「昔の絵図は、現代地図に比べて不正確だし客観的でもない。でも逆に、当時の人々が建築物や街をどうみていたか、心象風景があ

らわれている」

本渡さんの著書で主に解説されている江戸時代の「新撰増補大坂大絵図」を見てみよう。天満橋、天神

新撰増補大坂大絵図（大阪城天守閣蔵）に描かれた江戸時代の大阪三大橋。上から天満橋、天神橋、難波橋

橋、難波橋。水都の三大橋は、巨大に描かれる。四天王寺も縮尺を度外視して、大阪城に肩を並べる巨大さだ。「これらの名橋、お寺

がいかにか存在感があったか、そのあらわれだと思えます」

古地図をみたいと思いついた初心者はどうしたらよいただろう。本渡さんは「まずは地元の図書館へ」とアドバイスする。原図は閲覧不可も多いが、復刻版や図版入りの解説書などは、無料で見ることができ。最初は見時間をたっぷりかけ、古地図を広げて自由に楽しんでほしい。文字のない本である古地図が、何かを語りかけてくれるはず」（清川卓史）

▼次回は9月2日から「波に乗りたい」です